



ブルースター電照栽培における 蛍光灯の利用



写真1 枯死した花らい



写真2 ブルースターの電照栽培の様子(芸西村)

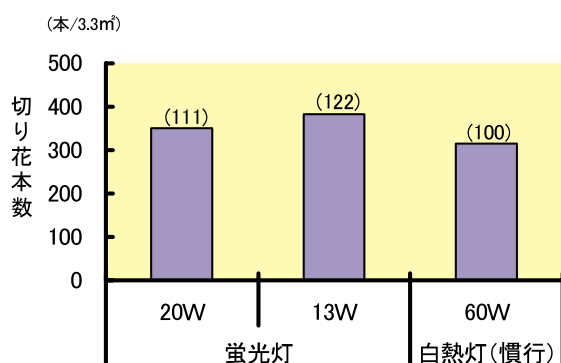


図1 光源の違いが収穫本数に及ぼす影響

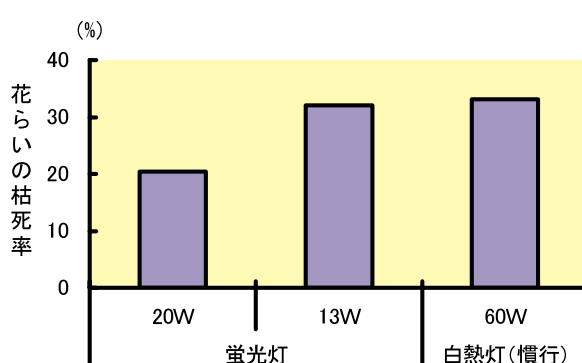


図2 光源の違いが花らい枯死率に及ぼす影響

注1) 品種は「ピュアブルー」。試験場所は芸西村。

2) 試験区:(1) 20W蛍光灯(白熱灯110W相当の明るさ)、(2) 13W蛍光灯(白熱灯60W相当の明るさ)、(3) 60W白熱灯(慣行)。

3) 電球設置数: 139灯/10a。電照方法: 8月5日～10月末までは、4:00～6:00の2時間の点灯、10～12月末までは、3:00～6:00の3時間の点灯、1月以降は2:00～6:00の4時間の点灯。

4) 定植: 7月15日、栽培本数: うね幅180cm、株間20cmの4条植え(36.8株/3.3㎡)。

5) (): 白熱灯を100とした時の指数。

ブルースターの電照栽培では、光源として60Wの白熱灯が使用されていますが、最近、農家では省エネ効果の高い蛍光灯への関心が高まっています。そこで、明るさが60W白熱灯相当の13W蛍光灯と110W相当の20W蛍光灯を用いて、切り花本数、切り花品質への影響について検討しました。

その結果、切り花本数は、慣行の白熱灯に比べて、13W蛍光灯で22%、20W蛍光灯では11%増加しました(図1)。

花らいの枯死(生育途中のつぼみが枯死

し落下する現象 写真1)率は、20W蛍光灯で20%と少なく、13W蛍光灯及び60W白熱灯では30%でした(図2)。

以上のことから、蛍光灯を用いることで白熱灯と同等以上の切り花本数、切り花品質が得られることが明らかになりました。

特に、13W蛍光灯については、電球代(7年使用するとして白熱灯の約8割)や電気代(白熱灯の1/4)の面から慣行の白熱灯より優れていると考えられます。

(花き担当 平石 真紀 088-863-4918)